

【会議日時及び場所】

日時 2024年2月13日（火）14時～16時

場所 町田市庁舎2階 2-3会議室

【出席者】（敬称略）

■委員

木下 勇（委員長）、中溝 章雄、新倉 敏和、齋藤 恵美子、福岡 ひとみ、松田 亜希子

※吉川 庄衛（副委員長）は欠席

■事務局

粕川北部・農政担当部長、杉山農業振興課長、星担当係長、池澤主任、森田主任、鬼塚主任、田代主任、吉田主事

■傍聴者

0人

【資料】

- ・次第
- ・資料1 第4次町田市農業振興計画（改訂版） 進捗状況確認表（2023年度）
- ・資料2 第4次町田市農業振興計画（改訂版） 進捗評価まとめ（2023年度）
- ・資料3 町田市物価高騰対策農業者給付金チラシ
- ・まち☆ベジBOOK

【議事要旨】

- ・事務局から「第4次町田市農業振興計画（改訂版）」の進捗状況について説明し、2023年度の取り組みに関する評価案の確認を行った。
- ・質疑応答及び意見交換を行った。

1 開会

- ・経済観光部北部・農政担当部長から挨拶。

2 委員・事務局紹介、委員長・副委員長決定

- ・各委員の紹介。
- ・委員長に木下委員、副委員長に吉川委員が決定した。
（吉川委員は当日欠席だったため、後日本人に確認し、正式決定する。）
- ・委員長の挨拶。

委員長 粕川部長からもお話があったが、町田市も進めている子どもにやさしいまちづくりに関わっている。農業と子どもの問題というのは違って見えるが、根っこはつながっている。子どもを育てるには「村」が必要だというアメリカの諺を使って、ヒラリークリントンさんが本を書いている。今は農業も進化して一人でできる作業もあるが、色々なことが共同作業や人のつながりで維持してきたものである。そのことは、農業が近代化しても必要なのではないかと思っている。IT化や後継者など様々な問題があるが、従来の農家の子弟だけでなく、つながりながら町田の農業を振興していく。もちろん、消費者にはまち☆ベジや近場で採れた農産物を使っただけで地産地消を進めて、そういったエコロジカルフットプリントをできるだけして、未来に持続可能な農業を作っていくことが大切である。町田の農業を子どもたちに知ってもらいながら、担い手になってもらうなど、農業を盛り立てていくような計画ができればと思っている。

3 推進委員会の概要について

・事務局から説明。

4 2023年度事業進捗確認及び評価について

・事務局から説明。

委員 基本目標 I (1) ②農業振興事業補助事業 2024年度以降は認定農業者に限定するという
ことだが、今までは認定農業者以外の方も含めて目標値を設定していたので、2026年度末
の目標値も変更した方がよいのではないか。

事務局 今まで認定農業者にも認定農業者以外にも補助ができるものだったが、目標値は認定農業者へ
の補助件数としていたので、来年度以降事業対象を認定農業者に限定しても、目標値に影響は
ない。

委員 認定農業者等の「等」は何を表しているのか。

事務局 認定新規就農者のことである。

委員 東京都で行っている東京農業アカデミーに参加している方が1人いて、農地を探している。と
ても真面目でよい人である。南町田のある農家のところへ手伝いに行っているが、小山周辺な
どより近くの農地をあてがえないものか。

委員 その方は公務員を辞められて、今は無収入で2年間アカデミーに通いながらアルバイトをして
いると聞いている。今手伝いに行っている先からはお手伝いするとお給料をいただけるので、
行っているようである。こちらにも相談があったので、農地を探しているところである。

委員 こちらにも相談があったので、色々なところに相談していて、小山の方を紹介しているところ
である。後継者のいない農家が自分で耕作できなくなると相談に来ることもあるので、紹介す
ることもある。

委員 今はわからないが、10年ほど前は農家の平均年齢が69歳くらい。認定農業者は計画書を提
出しなければならないが、高齢だと思いうように動けず、計画書が出せない。農家の高齢化が進
むと生産量は下がり、相続が起きると農地も無くなる。なかなか推進計画の通りには進まなく
なっていくと思う。

委員 町田の農家も高齢化が進んでいるので、跡取りがいなくて農家を辞めてしまうのではなく、東
京農業アカデミーに参加している方のような一生懸命やりたいという人に農地を貸して、農地
を継続できるような形がよいのではないかと思う。農家としても、農地貸すのは難しいと思う。
町田市の場合、他の市町村から比べれば集積化事業など先進的に行っているのでまだよいが、
将来的に農家と就農希望者がお互いに歩み寄れるようになったらよい。若い人が農業を続けて
くれば、今の町田の農地を継続していけるのではないか。そういったことが、この推進計画
の中に出てくればよいと思う。

委員 東京農業アカデミーの卒業生も認定農業者になれるのか。

事務局 東京都農業会議から推薦等があればなれると思う。

委員 その方はハウスを設置する希望を持っている。認定農業者になればハウス等の設置に対して補
助を受けられるのか。

委員 ハウスは光熱水費の高騰や病害虫の管理、システム操作など新規就農者にはつらい部分が多
く、今年度設置した人も、それらの部分に苦慮している。肥培管理をしていく中で害虫が発生
してしまったり、農薬が使えないこともあるので、大打撃を受ける。暖房代などの燃料費も高
い。ある程度の経験がないとデジタルによる一元化は難しいのではないか。

委員長 農業のデジタル化やイノベーションを導入しても、農業の経験を積まないとできない部分もあ
ると思う。担い手として、農家の子弟だけでなく新規参入を促進するというところで、ある程

度できているとは思いますが、農家側の問題がある。空き家問題などにも共通するが、先祖代々の土地という意識や親族との関係もあり、なかなか財産を「貸す」というのが難しいということがある。そのため農地がそのまま放置され、相続が発生したときに農地から他の土地へ変わってしまう。先手を打ち、現役で頑張っているときに借りたい人と信頼性・関係性が作れるとよい。ヨーロッパでは農業関係の学校を卒業していないと、農家として農地を継ぐことはできないが、日本は世襲制などもありそういったことはない。うまく農家と新規参入者が信頼関係を築けるようなプログラムやプロセスを支援するようなものがあるとよい。

委員 農家としてはJAが仲介に入ってくると信頼性が増す。

委員長 今話題に挙がっている方は皆さん知っている方のようなので、そういった方が成功モデルを作ると、他の人も後続していく。若い世代で農業をやりたい方、例えば静岡ではパーマカルチャーをやりたいという方もいる。そういった若い人と農家とのギャップを埋めるようなプロセスを作っていくことが必要である。アカデミーでも学ぶだけでなく援農しながらできるとか、後継者として農地貸借につながりそうな農家をターゲットにするなど、うまくマッチングできればよいのではないかと思う。

委員 その人は自分で色んな所へ行って、農地を見つけようとしているが、個人情報には得られないので苦労しているようだ。町田で農業をやりたいと言っている意欲的な人を何とかできないかと思った次第である。

事務局 基本目標I(2)①に記載しているが、町田市は農業研修事業を持っている。順位付けをする者ではないのだが、東京農業アカデミーと農業研修事業のどちらが上位かという話になってしまう。今年度6名就農意向があったが、土地の貸借ができず就農できなかったということがある。意欲や家庭事情をどう加味するかという話はあるが、市でも新規就農者にあてがう土地が無いということが一番の課題だという認識はある。農業研修を修了した新規就農希望者向けの貸借制度を検討しているところである。市有地の貸借を考えているが、永久には貸せないの、3年サイクルくらいめどに、市有地を借りている間に農家と関係性を築いてもらおうというものである。先ほども話が出たように、知らない方に土地を貸すことはかなりハードルが高く、農地法による貸借の印象が根強く残っているので、年齢が上の方ほど1回貸したら農地が返ってこないという認識の方が結構いるので、市としても協力をしていかなければいけないと思っている。

ある程度の市有地は準備をしているが、3年サイクルと考えても、1年間に2人か3人にしか貸すことができない。そうすると、誰に貸すかのセレクションが必要になってくるので、意欲があり管理できるなど、点数をつけた上で上位から貸していくことをやっていかなければいけない。そこに東京農業アカデミーの方をどう入れ込むかを悩んでいる。所長もいらして相談も受けたのでお気持ちはすごくわかるのだが、市の農業研修も行ってその修了生の土地も無いような状況なので、お約束できることは無いと回答している。今のところは相対でしか方法は無く、色々な方の協力を得ながら土地の情報を提供していただき、JAやたがやすに間に入っていただきながら、当面は進めていくしかないと考えている。

制度としてあてがう仕組みづくりが難しいということもあるが、年ごとに農地あっせんができる土地の数が変わってくること、担い手バンク登録者の中でも認定農業者と認定新規就農者の優先順位が高いので、新規就農者へ農地をあっせんすることが難しいというのが現状である。そういった経緯から、市の土地を新規就農者のために使えないかという議論が始まった。先ほどから話題に挙がっている方に今すぐ対応はできないが、そういった課題があることは認識し、考えているところである。

委員 その方は町田市民で、アカデミーの研修で市内の農家のところに行って真面目に取り組んでいたと聞いていたので、そういう人たちが何か応援できないかなと思った。相談が来れば土地や農家を紹介することはやっている。そういう人が増えてくれれば嬉しいし、増えたらまた対応を考えていければよい。そういう人がいるということ、市にも知っていただければと思う。

事務局 農地を持っている方に土地を貸そうという気持ちになってもらうことも大切だと思う。農地パトロールの時に、耕作できないようであれば農地バンク登録してもらうよう、農業委員にも説明してもらっている。生産緑地の方も制度上は新規就農者にも貸せるので、市の仕組みを見直していくべきと考えている。

委員長 農家側の意識転換が必要である。勉強会をやってもよいのではないか。終活をうたって農家の不安に付け込む変な業者もいるようだが、JAなどでそういった勉強会は実施しているのか。

委員 組合員向けに案内はしているが、高齢になるとそういったことが面倒になってきてしまう。

委員 農業研修生も土地を借りて耕作しているが、実際に販売までしているのはどのくらいの割合になるのか。ほとんどが趣味の範囲での耕作ではないのか。最近アグリハウスに大量に出荷していて、出荷することはいいことだが、出荷するまでいかない人が多いのではないか。

委員 出荷したいと思っている人は、JAのアグリハウスでも出荷できるようになったので出荷したり、西園直売所に出したりしている人が多い。「売る」ことの勉強も研修農場でやっているもので、以前よりも売めることは進んでいて、相談があったら販路を紹介している。自分で開拓している方もいて、市内で月1回程度開催されるマルシェや店舗などに出荷しているようである。土地が借りられないので、グループとして相対で借りて、耕作して、販売していると聞いている。ただ、数字的には出ないもので、正確な数はわからない。

委員 カインズへの出荷がアグリハウスよりも多くなっている。

委員 多摩境のカインズができたときに、産直売り場を作りたいという話が、はじめJAにあった。その時、研修生や卒業生、新規就農者などはJAのアグリハウスに出荷できない時代だったので、相談して出荷できるようにしてもらった。最初は量が作れなくてだれも出荷できない時期もあり、JAに出荷していない農家に話して、出してもらったこともある。ホームセンターの客層に合わせた値段設定にしたが、最近は価格が安すぎて新規就農者など出荷が難しい面もある。お客さんはよく来ているようだ。探せば色々なところで売っている。

委員長 新規参入した若い子たちは、従来の農業の感覚だと収量を気にするが、時に批判を受けることもあるけれど、本人たちはそのつもりではやっていない。自分の生きがいやスタイルとして携わりながら自給自足的に作っていたり、つながりで子育て中も小さいマルシェのようなものを作ったりと、そんなにもものがあるわけでは無いし安くないけど、いつも応援していて買いに来る人がいるような、そういった場を作ることが、楽しくて新しいスタイルになる。個人だと心細くなるが、共有している同じ世代の仲間がいればよい。行政ではできないこともあるが、行政以外のチャンネルがいくつかあった方が新規参入しやすい。市と協働しながら、行政だけで考えないメニューを増やしていければよいと思う。新しい人たちが自由にやれる雰囲気を作っていき、自立してできるのが一番よい。

委員 生産量の目標が無く、統計が取れないのではないか。

委員長 目標値に量はない。違うところに価値がある。

委員 そういう若い人たちのことをこういうところで情報交換するなどして、町田の農業を知ることができればいいのかなと思う。数字としては表れないが、町田の中でもたくさん動きがあるので、情報として得られればよい。町田でやりたいという人も多く、コロナが終わってマルシェもたくさん始まっているので、若い人たちが継続して農業を続けてもらいたい。そういった人

たちが頑張ろうかなと思ってくれて、町田の農地が守られていくことが望みである。

委員長

情報交換できる場はないのか。

委員

私のところには情報は入ってくる。消費者の方々はなかなか情報が無い。

委員長

基本目標Ⅳに絡んでくるかもしれないが、農業祭の時など、どこかで町田の農業者が集まって後継者問題とか勉強できるような場はあるのでしょうか。

委員

農業祭の時は、農業者の皆さん集まるので話すことはある。町田市の中でもいろんな会議があって、農業者と消費者が集まる会もあるが、多くの消費者は町田の農業の情報を知らないなので、この場で情報共有をして、委員の方から宣伝できればよいと思う。

委員長

新規就農者との出会いや、農的な活動をして子どもを育てる時流も高まっているので、うまくニーズと資源をマッチングできるような場があるとよい。最初は簡単な勉強会でもよい。この計画は人数の達成目標を定めているが、数よりも質的な内容が抜けてしまうので、定性的評価を一言加えるなどご検討ください。

委員

基本目標Ⅳの「多様な交流機会をきっかけとした市民の農に対する魅力の向上」という言葉が素晴らしいので、これができるようにしていけばよいと思う。

委員長

次年度にそういった指標を組み込めれば入れて改善できればと思う。宿題として、齋藤委員と市で相談して提案いただければと思う。

委員長

基本目標Ⅲ（２）③市内産農産物流通促進事業について伺いたい。

委員

どんなものが流通促進にいいのか検討しているところである。先日、食育推進会議に出席して、その中には学校関係の方もいらっしゃったのだが、その会議で「まち☆ベジ」は知っているけどどこで売っているかわからないという人がまだいることを知った。先ほど認知度37%という報告があったが、会議の委員の中でも知らない人がいた。アグリハウスは知っているが、夕方行くと野菜が無いとか、仕事で開いている時間に行けないとかというご意見を聞いた。アグリハウスの他に、カインズで売っていると伝えたが、カインズに代わる施策は何がよいのかと考えている。

委員

小学3・4年生の副読本で、農業の勉強をするので、どこかにまち☆ベジマークを入れられないか。鶴川のアグリハウスやJAの資材置き場などの写真が掲載されている。5年スパンで切り替えのはずなので、そういうものに載せれば結構効果があると思う。多いときは年間7校ほど見学に来ている。

委員

小学3年生のカリキュラムとして、JAの職員がゲストティーチャーとして話している。子どもは知っているけどお母さんは知らないのだと思う。

委員

直売所やイベントなどでは、なるべくまち☆ベジの旗を立てるようにしているが、まだまだのようだ。

事務局

生鮮宅配ボックスの設置に関する反省としては、ある程度の稼働はしていたけど、普段買わないものは買わないということがわかった。アグリハウスの主たるユーザーがクックパッドを使うかと言ったらなかなか厳しい。ターゲットとすべき世代の人たちが、アグリハウスなどの直売所で買う機会がないので、アプリ上でも買いにくいということがあった。

そのため、今回アグリハウス鶴川にサンプルになっていただき、子ども向けのイベントを実施するなど、本来ヘビーユーザーになるだろう子育て世帯向けに来てもらう施策を行った。そのあたりから、サブミナラル効果ではないが、まち☆ベジマークを見られる機会を増やしていきたい。買ったことある人自体は55%いるので、マークは知らないけど買ったことがあるのか、詳しい分析はできていないが、イベントを実施して定期的にアグリハウスを訪れる人が増えるとその数値も変わってくる。

子どもを育てる世帯に周知するには、子どものことをやっている施設に協力してもらわないといけない。SNS世代になったとはいえ、情報を取ろうと思ってもらわないと届かないので、知ってもらうことは極力アナログのプッシュ型で行い、保育園などにPRしていただいた。また、子どもセンターのイベントの時に周知していただき、そこで知った人もいた。200人程度の来場があり、準備していたものがすべて無くなるほどであった。ある程度定着してきているとは聞いている。そういったことを先に実施して、アグリハウスに行ったことがある人を増やしたうえで、宅配ボックスのようなことを実施すると、結構効果が出ると思っている。どういうやり方で実施するかは、これからJAと協力してやっていかなければいけないし、宅配をするにはアプリケーションが必要だと思う。支払いなどいくつかハードルがあるので、考えながらやっていきたい。新規就農の方にも参加してもらっていいと思うが、ある程度の価格競争は発生する。経済活動として考えたときに、自分のものを選んでもらうためのマーケティングの作戦を考えなきゃいけない。今後、研修農場のカリキュラムを新しく入れてもらうことを考えている。

委員長

すべてはコミュニケーションだと思う。顔写真がある、名前を載せるなど、それもひとつのコミュニケーションである。自分は頑張っていることを見せられるとよい。多様な売り方があると思う。

保育園児の散歩コースにまち☆ベジを売っているところがあれば、子どもの食育にもなる。小学生だと探求学習ができる。今議論していた悩みについての提案をしてもらうこともできる。そういったことをする中で、子どもが関心を持てば保護者も関心を持つので、それで浸透していくことも考えられる。タイアップできる小学校や先生がいるとよい。イベントの実施だけによらない、多様なPRの方法があるので、もう少し色々な体験の仕組みがあるとよい。鶴川のアグリハウスで実施したチャレンジなどは、質的な評価もできると思う。また、事務局の素案を作るときなど、質的な評価を反映できる仕組みを次年度に考えていきたい。

委員長

議論は終結した。事務局案に疑問等はないか。

委員一同

異議なし。

5 計画に未記載の新規事業等に関するご報告

- ・事務局から説明。
- ・特段意見なし。

6 総評・その他

委員長

まだ発言いただいていない委員から一言いただきたい。

委員

農業のことはよくわからないので発言はできなかったが、まち☆ベジを知ってもらうために協力していきたい。

委員長

消費者には物価高の補助が無いので大変でしょう。

委員

物価高の中で農業者も大変なので、理解はしていただけたらと思う。

委員長

燃料費など色々な価格が上がっているので、消費者の方にもご理解いただきたい。

委員

まち☆ベジをひろく知ってもらうためにイベントをしているみたいだが、行こうと思わないと行かない。生産量が少ないのでスーパーで販売できないというのは重々承知しているが、やはり日頃生活している圏内で、自然に目に触れるところにまち☆ベジが置いてあるとよい。まち☆ベジのバスやパンフレットだと教科書で学ぶ感じで、まち☆ベジだけ一人歩きしていつてしまうので、野菜を手にとったときにまち☆ベジのマークが書いてあるとか、ポップがあるなど、体験としてわかるとよい。まち☆ベジを知らない人が食育推進会議の中にもたくさんいたということは、「まち☆ベジは聞いたことはあるけどそれが何だろうなんだろう」と思ってし

まうのではないか。

委員長 この冊子もよくできているが、まち☆ベジのキャラクターは無かったか。

事務局 ログマークがある。

委員長 子どもたちにキャラクターを考えてもらってもいいのではないか。

委員 売っている野菜にまち☆ベジと書かれているのか。

委員 書いてある袋はあるが、透明な袋に白文字なので見にくかったり、シールを貼るのは面倒だったりする。

委員 ログマークは可愛いので、いろんな模様がありすぎるとわかりにくいので、もっとわかりやすいものがあるとよい。

委員 シールで付加価値つけようとしても、高くは売れない。東京都のエコ認証マークでも、貼ってあるものがいっぱいあると売れない。結局、正面に置いてあるものが売れる。

委員長 記号自体が付加価値を持ち、発信力を持てば、コピーとしての機能を持つが、それまでに時間かかる。子どもたちに親しみを持てるような名前をログマークにつけてもらったり、性格を持つようなものにしたりするといいかもしれない。まち☆ベジ何周年かのときにやってみるのもよい。

事務局 マークごと根本的に考え直してもよいかもしれない。

委員長 先ほど話題に出た若い人たちの就農も、大量消費とか競争とか、従来と違うところに価値を持っているようである。そういう人たちの求めていることも聞きながら、うまく受け止められるような環境を作り従来の農業者に新しい価値に気づいてもらったり、うまく接点を持って後継者などの問題解決にもつながったりするような、従来の価値だけでない希望的なモデルがSNSなどを通して実践して広がっていくところに、新しい価値がありそうな気がする。

そういう部分は新規就農者だけでなく、農家の子弟、孫世代に通じるものがあると思うが、デジタルやSNSなど、うまくマッチしながらITを載せていけるような担い手が育っていくのが、これからのスタイルになると思う。直売所をとっても対面があれば無人もあり、色々な仕掛けがある。多様なチャンネルで用意していくことも大切だが、基本は農家と消費者とのコミュニケーションである。まち☆ベジや環境問題、地産地消に取り組んでいく農家と消費者のコミュニケーションが、町田の魅力を作っていく。そういう取組があるから、町田で農業をやりたいという人がいるわけで、方向性は間違っていないと思う。まち☆ベジをシンボルにしながら地産地消を展開していくことは、面白いと思う。

7 閉会

・事務局から事務連絡。